

滋賀大学とともに

未来に繋ぐ百周年を迎えて想うこと

澤木聖子 / 滋賀大学 経済学部 教授

滋賀大学に奉職して今年で26年になります。生を受ける場所も時代も自分では選べません。滋賀大学の百周年の慶賀の時を現任教員として迎えられましたことは、私の人生の中でも奇跡の一つだと感じています。幸せに感謝しながら、徒然に想いますことを記させて頂きます。

初めて滋賀大学を訪れたのは、1997年10月の穏やかな陽ざしに包まれた午後でした。当時、名古屋大学で日本学術振興会特別研究員PDの身分で大学職の公募に応募し続けていた私は、滋賀大学で採用のための面接を受けることを許され、緊張しながら名古屋から新幹線で米原に向かいました。米原駅のホームに設置されている自動販売機の飲料が冬仕様のホット缶であり、待機している車内に暖房がかかっていたことに軽いカルチャーショックを受けたことを今でも鮮明に思い出します。湖北に位置する彦根は、桜花の春、深緑の夏、紅葉の秋、白雪の冬と豊かな自然の景観に恵まれ、大学が位置する品格ある城郭の佇まいが私は大好きです。この地で、私は多くの人々との邂逅を経験することになります。地域社会の人々、教職員、学生にも恵まれました。以下、滋賀大学の100年の中で、私が時を重ねた4分の1の時間、変わりゆくこと、変わらないことについて考えてみたいと思います。

私が滋賀大学に着任した頃は、大学のご近所にも銭湯がありました。研究室で徹夜で仕事をする火曜日の夜には必ず通いました。番台のご主人や地元の人々と何気ない会話を交わす中で、自分も彦根の風土を肌身で感じるができていたように思います。北野神社のお向かいには、たこ焼きやさんがあり、よく寄りました。化粧品雑貨を扱うお店や食堂のご夫婦、城町にはよそ者の私を支えて下さる地元の方々のご親切がありました。お店は閉じられご近所の景色は変わりましたが、今でも変わらぬ交流を頂くができています。

滋賀大学に赴任してまず印象的でありましたことは、事務職員の方々が遅くまで仕事に取り組まれている様子でした。教員という立場でお世話になることで、院生時代とは違う視点で気づくことも増えました。事務職員の皆様の仕事内容の多さや難しさを少

しずつ知るにつけ、国立大学の運営の仕組みや膨大な仕事量にご対応される職員の皆さまには常に感謝の気持ちを持ち続けています。できるだけご迷惑をおかけしないようにと思いつつながら、この点は今も変わりません。

また、学界だけではなく社会でも著名な先人の諸先生の薫陶を受けることもでき、多くの先輩教員や優秀な若い同僚にも恵まれてきました。着任した時からこの思いは変わりません。自分が滋賀大学にご縁を頂けたことは過分なことであると常に自戒しています。

このような心許ない私が、滋賀大学で仕事を続けることができましたのは、やはり学生たちとの出逢いにあると思います。常に20代の若い学生と接する中で、自身がいつの間にか学生たちの親御さんの年齢を超えても、着任時と変わらない心身で正対してきました。しかし、確実に学生と自分との間の世代間ギャップが生じてきているためか、ここ数年は、学生の価値観や意識の変化に戸惑うことも増えてきました。今日の若者に向けてコミュニケーションの仕方をアップデートすることの必要性を日々痛感しています。とりわけ、2020年度から直面した新型コロナウイルスによるリモート・ワークの本格導入は、学生にも教職員にも、そして社会や世界全体にも、学ぶことや働くことに対する価値観を大きく一変させました。キャンパスライフを謳歌することができなくなった学生を気の毒にも思いましたが、教員が工夫することで、いつの時代も若い学生の無限の能力を発見し、引き出すこともできるのではと思いついています。当世の学生のデジタルに強い特性を活かすことで、新たな時代に向けた学びを発展させることができる環境を、ここ滋賀大学は備えています。

他方、最近卒業生達が声をかけてくれる機会も増え、卒業生を送り出せるこの仕事の素晴らしさ、有難さを実感する毎日です。20歳代から40歳代にまで継承されているゼミ生の経糸・緯糸に育まれながら私は生きています。百周年を心からお祝いし、滋賀大学、陵水会のみなさまの久遠のご発展をご祈念申し上げます。